

メトロポリスの誕生とアメリカ労働者階級

竹 田 有

【要約】 世紀転換期に形成され、階級とエスニシティによる居住空間の分離を特質とするメトロポリスにおいては、当時の高い社会的流動性の下で周辺部において持家を獲得できた熟練層と都心部にとり残された半・不熟練層との間に、ライフスタイルの上でも意識の上でも亀裂が生じた。労働者が集中した都心部で対抗的労働者階級文化が形成されるが、これを忌避した工場は周辺部へ脱出し、この結果生じた労働者居住地域の分散は労働者相互の交流を阻害した。また、労働者は労働の場でのビジネス・ユニオンズと生活の場でのマシーン政治という異なった組織原理によって引き裂かれ、ウォード制から市単位代議制への移行に代表される都市政治の構造改革は労働者の政治的発言力を封じ込めた。メトロポリスのアメリカ労働者階級は、階級的連帯を志向するパースペクティブと力量とをもてなかったのである。

史林 七四巻五号 一九九一年九月

はじめに

この二〇年ほどの間にアメリカ労働史研究は、組合史という狭い制度的アプローチを乗りこえて、労働者階級の社会史という方向性を打ち出している。研究の焦点は組合組織や団体交渉から、労働者が保持する多様な文化や彼らの形成するコミュニティへと移り、従来無視されてきた労働（者）の社会的・文化的側面ならびにエコロジカルな側面が解明されるようになったのである。この新しい方向性の背後には、生活の場における労働者の活動や状況に分析の光をあてない限り、労働者階級の全体像も明らかにならないし、労働の場における彼らの行動や状況さえも充分には理解できないのではないかという反省があったことは確かであろう。本稿はそのような反省をふまえて、メトロポリスにおけるアメリカ労働者階

級の存在形態に焦点をおき、労働史と都市史との架橋を試みたものである。

合衆国においては、一九世紀後半から工業化と都市化の波をうけて都市構造が革命的变化をとり、一九世紀的な一点集中型の工業都市から二〇世紀的な分散型のメトロポリスが形成されてくる。本稿ではまず、メトロポリスの秩序形成過程と都市住民の居住形態の変容とが明らかにされる。次に、階級による居住空間の分離を特質とするメトロポリスの新秩序が、労働者階級の存在様式と彼らの階級意識形成にいかなる影響を与えたかが検討される。

一 メトロポリスの形成過程と居住空間の分離

工業化がまだ本格化していない一九世紀中頃までの合衆国の都市は、その規模が中心から半径二マイル以内の、コンパクトで「歩き回れる都市」(The Walking City)であり、移動は足に、運搬は荷車に頼っていた。この都市は次のような特徴をもつ。(一)作業場や商店、倉庫、住宅などが混在し、土地利用が機能的に特化していなかった。(二)単独もしくは六名程度の単位で生産労働が行われていた当時では、仕事場と住居が同一か、近接していた。たとえば、仕事場はある建物の一階にあり、その建物の二階または裏に住居があった。(三)都市住民は、階級、エスニシティ、人種という社会的亀裂に従ってそれ程明確には隔離されてはいなかった。たとえば、職人や徒弟が親方の家に住み込んでいた場合もあったし、作業場経営者とその作業場の隣りに、それゆえ作業場近辺の労働者住宅の近くに住んだりした。また、貧しい不熟練労働者が、大通りに面して富裕な者が住んでいる同じブロックの裏の路地に住んでいた。階級を異にする人々は明確な地理的分離をまだ経験していなかったのである。(四)とはいえ、富裕な商人、地主、行政官らエリート層が、重要な経済的・政治的機能が集中する都市中心部に住み、他方貧民は、屠殺場や皮なめし工場などもある不便な周辺部にかたまる傾向があった^①。しかしながら、一九世紀後半における工業化と都市化の進展とともに、以上のような「歩き回れる都市」の構造は革命的と
いってよい変容をとげる。

まず、仕事場と住居が分離した。手工的熟練の希積化と生産手段の資本家への集中によって生産が家庭から工場へと移り、家族経営体が崩壊していく。家庭内で行われていた生産活動が資本主義的市場経済の中に吸収され、工場制度が家庭から賃金労働者を引っ張り出すのである。たとえば、住居内に仕事場があった昔とは違って、今や中流層の夫は外に働きに出かけ、かつて仕事場であった、通りに面した一階の部屋は客間となった。この結果、生産と消費とが、機能の上でも場所の上でも分離されて、家庭は消費の場となる。そして、この生産と消費の間の、労働と生活の間の分離こそが、明確な住宅地域なるものを生みだし、住宅地域と非住宅地域という土地利用の特化を進行させたのである。^③

また、工業化が本格化するにつれて、生産と流通の殆どすべてが都心部に集中した。衣服業や製靴業などが倉庫を作業場として発達し、鉄道駅の近くでは食品加工工場や、鑄鉄製造工場、圧延工場、各種機械工場が工場地帯を形成した。この都心部には金融街、小売店街も形成されて、いわゆる都心部ビジネス地域（以下CBDと略記）として発展していく。^④

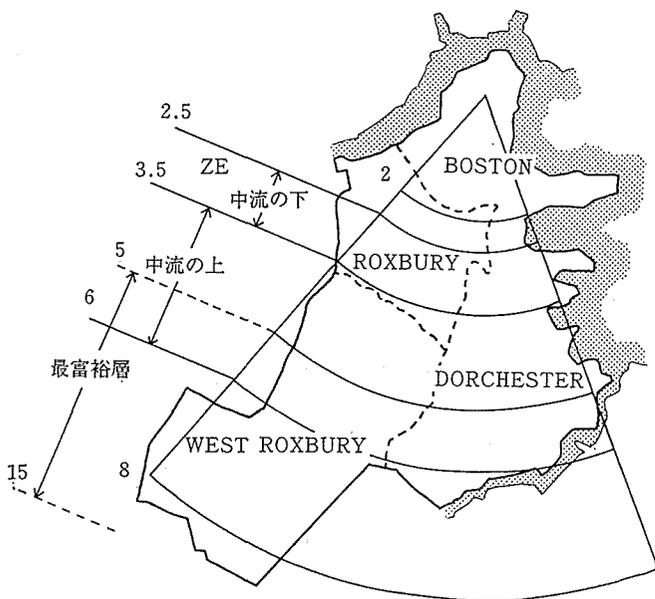
他方、労働者も都心部に集中していた。なぜなら、徒歩に頼らざるをえない労働者が居住地を決める最大の理由は職場との距離であり、彼らの仕事の殆どが都心部に集中していたからである。^⑤ こうして生産と流通と労働が集中した都心部では、過密状態、地価高騰、馬糞や上下水道の不備から生じる非衛生的環境ならびにかずかずの公害がみられ、都心部は居住地としては全く不適當な場所となっていた。しかしながら、不熟練低賃金労働者はこの場を離れられなかった。日雇いであるために職場が一定せず、しばしば経験した失業の際には別の仕事をすぐに見つけなければならなかったために、多くの多様な雇用機会を自らと家族にも提供した都心部に縛りつけられたからである。

CBDが発展・膨張し、その内部から住宅を駆逐していく一方で、人口集中の圧力をうけて都市周辺部が住宅地として急速に開発されてくる。すなわち、一八五〇年代に馬に引かれて線路上を走るホース・カーが、九〇年代には路面電車が導入されるに及んで、都市空間が中心から四マイル、さらには一〇マイルへと膨張していった。この新しく開発された住宅地域には、路面車両や鉄道で通勤する経済的余裕のある中間層以上の人々が、都心部を脱出して移り住んだ。^⑥ 彼らは、

CBDの周辺のスラム街に集中しつつある、理解不可能な言語や習慣をもち込む新来移民や不気味で威嚇的な言動を示すプロレタリアを忌避し、資本主義的生産が蓄積していく公害、汚染、混沌から可能な限り離れようとした。自らとは異質の人間や不快なものとの間に空間をおきたいと考えたのである。^⑦

こうして、社会的差違が都市の空間的パターンに明確に反映されるようになり、「歩き回れる都市」の場合とはむしろ反対に、メトロポリスの都心部には貧困層、周辺には富裕層が居住するようになった。すなわち、CBDのすぐ外側の「インナーシティ」には、最も貧しい下層の者がエスニシティと人種によって分離されて、劣悪なテナメントや連棟式住宅に住んだ。この外側、つまり「歩き回れる都市」のちょうど外側に形成された「新興住宅地」(Zone of Emergence 以下ZEと略記)には、自営業者や商店主、簿記係やクラークなどのホワイトカラー層、それにブルーカラー層のエリートである熟練工ら中流の下層が居住した。主に路面電車が導入された一八九〇年代以降にインナーシティから脱出してきたこの層は、CBDにある職場にいかに近いかではなく、どれだけ離れているかを基準にして初めて居住地を選択したのである。このZEの外側には、卸売商人や弁護士、建築請負業者、工場経営者ら中流の上層が、そしてさらにその外側には最も富裕な人々が、広い庭つきの一戸建邸宅をたてて、「郊外住宅地」を形成した。^⑧

以上のことを鮮やかに示しているのが、ウォーナーが作成したボストンの扇形図である。ボストンは一九世紀中頃の半径二マイル規模の「歩き回れる都市」から、一九〇〇年には半径一〇マイルにも及ぶメトロポリスへと膨脹した。この図は、ボストン・プロパーとその外側にあるロクスベリー、ウエスト・ロクロベリー、ドーチェスターの三地域とが、一九〇〇年に階級と所得の差に従ってどのように住み分けられていたのかを示している。ボストン人口の約半分はインナーシティを脱出できなかったが、残りの約半数が新しく開発された地域に脱出して階層別に住み分けを行なった。中心より二・五から三・五マイル離れたZEには、人口の二〇から三〇%を占めた中流の下層が居住する。また、人口の一五%を構成した中流の上層は、ZEよりかなり広く人口密度も低い三・五から六マイルの地域を占めている。さらに、一番外側の



Sam B. Warner, Jr., *Streetcar Suburbs*, p. 36 より作成。

中心より五から一五マイル離れた広大な地域では、人口のわずか5%を占めるにすぎない最富裕層が田園的生活を享受していた。留意すべきは、三〇年前には、中流の上層は中心により近い二・五から三・五マイルの帯に、最富裕層は三・五から一〇マイルの帯に居住していたことである。当時の都市人口の流動性は高く、中流の下層がインナーシティから脱出して中流の上層の居住地に進出するにつれて、中流の上層は三・五マイルより外側に退き、この波の進出を受けた最富裕層が今度は五マイル以遠へと住居を移していった。⑤ 当時の急増する都市人口の圧力をうけて、各々の階層の居住地帯はダイナミックに外側へ移動し、階級(層)的同質性を保とうとしたのである。⑥

ジャクソンによれば、ニューヨーク市マンハッタンの弁護士の平均通勤距離は、一八三五年から六五年にかけて〇・八マイルから二・四マイルへと三倍になった。次の三〇年間にはそれ程のびなかったが、ホース・カーが電化された一八九五年から一九一五年にかけては三・八から七・五マイルへと通勤距離は二倍になり、住居はますますマンハッタンの職場から離れていった。⑦

また、シカゴ社会学派のクレッシェーは、都市内部における民族集団の移動を、侵入・軋轢・退去(旧住民の離脱)・再組織のサイクルをくり返す継続的プロセスと捉えた。彼によれば、諸集団は、経済的・社会的地位が改善されるに

つれて、都心部から周辺部へと移動するとともに、アメリカ的文化・習慣を身につけてゆき、最終的には、コスモポリタンの居住地域の中へ個人として散らばっていくのである。すなわち、シカゴの諸集団の中で最も豊かで地位の高いアメリカ生れの者が郊外への移動の先頭に立っていた。一九一〇年に彼らの居住分布の中心からの平均距離は四・七マイルであったが、三〇年には六・六マイルとなり、全人口の居住分布の中心からの平均距離よりも一マイル長かった。他方、ドイツ系の平均距離は一八九八年には三・二マイルであったが、一九三〇年には五・七マイルとなり、アイルランド系は同期間に三・二から六・四マイルにのびた。しかしながら、新来系はポーランド系は同期間に二・八から四・六マイル（全人口の平均よりも一マイル中心に近い距離）の所にしか移動せず、このことは、彼らの半数近くが最初の定住地であるノースウエスト・サイドに留まり、経済的上昇や同化をまだ経験していないことを示していた。同じく新来のイタリア系も同期間に一・五から三・三マイルの所に移動しただけであった。

こうして、世紀転換期において、「歩き回れる都市」とは全く異質の構造をもつメトロポリスが誕生し、階級的区分ならびに民族的・人種的亀裂がはっきりと空間的形をとるようになったのである。このことを表(a)で再確認しておきたい。この表は、一八六〇年と一九三〇年における、フィラデルフィア住民の都心部と周辺部への分布状況を示したもので、「歩き回れる都市」とメトロポリスのコントラストを浮きぼりにしている。一八六〇年には、全人口と職種の全サンプルとが、周辺部と都心部に大体六対四の割合で分布していた。その中で、低所得貧民層を示すレイブラーが周辺部にやや集中する一方、大工、機械工、靴工、そして仕立工という当時の代表的職種は全体と大体同じ比率で、つまり片寄りを示すことなく分布していた。また、周辺部にあった織物工場の近くに住むイギリス系を例外として、移民も全体と同じ比率で分布していた。それに対して、一九三〇年のフィラデルフィアの状況はがらりと一変する。全人口と全家族の分布状況は周辺部と都心部においてそれぞれ大体七対三と四対六であった。まず、低い家賃（二九ドル以下）を払う層が圧倒的に都心に集中し、持家層と五〇以上一〇〇ドル未満の家賃を払う中流層が周辺部に重心をおいている。そして、世紀転換期に

表(a)

LOCATION OF FOREIGN BORN, NEGROES, AND SELECTED OCCUPATIONS TENURES AND RENTS, BY PERCENT IN CORE OR RING 1860, 1930								
—1860—								
	<i>Negro</i>	<i>Foreign Born</i>	<i>Britain</i>	<i>Germany</i>	<i>Ireland</i>		<i>Total population</i>	
Ring	34.9	62.1	73.7	60.4	60.8		61.9	
Core	65.1	37.9	26.3	39.6	39.2		38.1	
Total Number	22,185	168,556	22,398	43,833	94,989		565,529	
	<i>Laborer</i>	<i>Clerk</i>	<i>Carpenter</i>	<i>Machinist</i>	<i>Shoemaker</i>	<i>Tailor</i>	<i>Sample</i>	
Ring	75.5	40.6	61.7	69.5	66.9	68.9	58.9	
Core	24.5	59.4	38.3	30.5	33.1	31.1	41.1	
Number in Sample	442	283	149	82	181	122	4,740	
—1930—								
	<i>Negro</i>	<i>Britain</i>	<i>Germany</i>	<i>Ireland</i>	<i>Italy</i>	<i>Poland</i>	<i>Russia</i>	<i>Total Population</i>
Ring	19.7	52.6	43.8	52.0	29.5	27.4	30.0	70.0
Core	80.3	47.4	56.2	48.0	70.5	72.6	70.0	29.6
Total Number	222,504	36,593	38,066	31,359	68,156	30,582	80,959	1,950,961
	<i>Own Their Home</i>	<i>Rent at Under \$ 15</i>	<i>Rent \$ 15-29</i>	<i>Rent \$ 30-49</i>	<i>Rent \$ 50-99</i>	<i>Rent \$ 100 and up</i>	<i>Total Families</i>	
Ring	52.4	10.9	16.8	40.3	60.5	44.2	44.2	
Core	47.6	89.1	83.2	59.7	29.5	55.8	55.8	
Number of Families	232,591	10,142	63,432	96,026	36,427	6,538	448,653	

Sam B. Warner, Jr., *The Private City*, p. 55.

流入してきたイタリア系、ポーランド系、ロシア系の人口は、黒人とともに、全体の傾向とは正反對の比率で都心部に集中した。メトロポリスにおいては、階級、人種、エスニシティの線にそった分離が鮮明に現われ、都心部は貧民、新移民、そして黒人の世界になったのである。^④

こうして、世紀転換期に形成される合衆国のメトロポリスでは階級的区分がはっきりと空間的形をとり、さらに階級別の住み分けの基盤の上に、エスニシティと人種別による住み分けが重なっていく。インナーシティには、半・不熟練労働者と貧民層を構成した東・南欧系の新移民と黒人とが、エスニシティと人種という強烈な属性を秩序原理として、この地域を住み分ける。インナーシティを出て郊外へ向かうにつれて階級の階梯が上っていき、同化を経験しつつあるドイツ系やアイランド系の旧移民とアメリカ生れの人々の世界となる。彼らの間では、エスニシティは内に隠され、居住パターンを決定する力を失いつつあるが、^⑤

インナーシティの newcomer と黒人に対しては強い排他意識が保たれていた。郊外化は、階級的同質性の欲求と民族的・人種的差別の欲求とを同時に満たすものであったのである。^⑨

- ⑧ 以下を参照せよ。Kenneth T. Jackson, *Crabgrass Frontier: The Suburbanization of the United States* (1985), pp. 14-19; David M. Gordon, "Capitalist Development and the History of American Cities," in W. V. Tabb and L. Sawers, *Marxism and the Metropolis* (1978), pp. 32-35; Richard A. Walker, "The Suburban Solution: Urban Geography and Urban Reform in the Capitalist Development of the United States," unpublished Ph. D. diss., Johns Hopkins Univ., 1977, pp. 219-28; Sam B. Warner, Jr., *The Urban Wilderness: A History of the American City* (1972), pp. 81-84; idem, *The Private City: Philadelphia in Three Periods of Its Growth* (1968), pp. 11-21, 50, 52, 56-58.
- ⑨ 一九世紀半ばから二十世紀半ばの間に、都市圏の拡大は、工業化の進展と、*「セントラル」* Patrick O'Donnell, "Industrial Capitalism and the Rise of Modern American Cities," *Kapitalistale*, 6 (1977), pp. 91-128 を参照。M. Klein and H. A. Kantor, *Prisoners of Progress: American Industrial Cities 1850-1920* (1976) を参照。
- ⑩ Richard A. Walker, "A Theory of Suburbanization: Capitalism and the Construction of Urban Space in the United States," in M. Dear and A. J. Scott, *Urbanization and Urban Planning in Capitalist Society* (1981), pp. 386, 389; David Harvey, "Labor, Capital, and Class Struggle around the Built Environment in Advanced Capitalist Societies," *Politics and Society*, 6 (1976), pp. 275-76.
- ⑪ Edward K. Muller, "From Waterfront to Metropolitan Region: The Geographical Development of American Cities," in H. Gillette, Jr. and Z. L. Miller, *American Urbanism: A Historical Geographical Review* (1987), pp. 111-12. 以下を参照せよ。周の『都市地理学』の「都市の形成と発展」を参照。David Ward, "The Emergence of Central Immigrant Ghettos in American Cities: 1840-1920," *Annals of the Association of American Geographers*, 58 (1968), pp. 343-59.
- ⑫ Stephanie W. Greenberg, "The Relationship between Work and Residence in an Industrializing City: Philadelphia, 1880," in W. W. Cutler, III and H. Gillette, Jr., *The Divided Metropolis: Social and Spatial Dimensions of Philadelphia, 1800-1975* (1980), Chapter 6. 以下を参照。E. P. Erickson and W. L. Yancy, "Work and Residence in Industrial Philadelphia," *Journal of Urban History*, 5-2 (1979), pp. 147-82; David Ward, *Cities and Immigrants: A Geography of Change in Nineteenth-Century America* (1971), Chapter 4 を参照。
- ⑬ ホーム・カーが利用されてきた一八八〇年の「マラデルマン」は、往復運賃「二セント」で、一日の賃金が約「一ドル三〇セント」であった。不熟練労働者には「五分」の「二ドル」であった。熟練上級労働者には「重く負担」であった。当時通勤したホーム・カーを常利用していた者は被雇用者の一割弱にすぎず、主に職場より一マイル以上離れた所に住む裕福なホワイトカラーの上層であったという。また、殆どの労働者が通勤に

公共輸送機関を利用する者の増加のせいで、ニューヨーク市は一九一〇年に際した。Theodore Hershberg, et al., "The 'Journey-to-Work': An Empirical Investigation of Work, Residence and Transportation, Philadelphia, 1880 and 1880," in T. Hershberg, *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century* (1981), pp. 146-47, 151-52.

⑦ Walker, "The Suburban Solution," p. 243.

⑧ この居住問題の分類については以下を参照。 Jackson, *op. cit.*, p. 137; D. R. Goldfield and B. A. Brownell, *Urban America: From Downtown to No Town* (1979), pp. 134-64, 202-14; Margaret S. Marsh, "Suburbanization and the Search for Community: Residential Decentralization in Philadelphia, 1880-1900," *Pennsylvania History*, 44-2 (1977), pp. 99-116; Ward, *Cities and Immigrants*, Chapter 5; Warner, *The Urban Wilderness*, pp. 98-112; idem, *The Private City*, pp. 169-76. たゞ、最富裕層の中には都心部の一角を排他的高級住宅街として囲い、その住み続けた人々もいる。

⑨ Warner, *Streetcar Suburbs: The Process of Growth in Boston, 1870-1900* (1962), pp. 53-64.

⑩ ホストンの人口は一八六〇年の約一八万から、九〇年の四五万、一九二〇年の七五万へと増加した。また、ニューヨークの人口はそれまでの時期に八二万から、一五二万、五六二万へと、フィラデルフィアは同じく五七万、一〇五万、一八三万へと、シカゴは一十二万、二二〇万、二七〇万へと著しい増加をみた。

⑪ シンシナティとシカゴにおける階級別住み分けを示すものとして、Zane L. Miller, *Boss Cox's Cincinnati: Urban Politics in the Progressive Era* (1968), pp. 43-45 の図を Warner, *The Urban*

Wilderness, p. 106 の図を参照。特に、シカゴ社会政策の Ernest W. Burgess が述べた「シカゴには市民階級を代表する有名な図は幾も存在する。R. E. Park and E. W. Burgess, *The City* (1925, 1967), pp. 51, 55 を参照。

⑫ K. T. Jackson, "Urban Deconcentration in the Nineteenth Century: A Statistical Inquiry," in L. F. Schnore, *The New Urban History* (1975), p. 138. Hershberg, et al., *op. cit.*, pp. 136-37 を参照。

⑬ Paul F. Cressey, "Population Succession in Chicago: 1898-1930," *American Journal of Sociology*, 1 (1938), pp. 59-69.

⑭ Warner, "If All the World Were Philadelphia: A Scaffold for Urban History, 1774-1930," *American Historical Review*, 74 (1968), pp. 32-34. たゞ、この図は未編の家族や個人レベルの統計の合計を以て示していることが不明。

⑮ Charles Levenstein, "The Political Economy of Suburbanization: In Pursuit of a Class Analysis," *The Review of Radical Political Economics*, 13-2 (1981), p. 29; Michael N. Danielson, *The Politics of Exclusion* (1976), p. 7; Warner, *Streetcar Suburbs*, pp. 46-47, 65-66, 79-80.

⑯ 以下を参照。 Alan N. Burstein, "Immigrants and Residential Mobility: The Irish and Germans in Philadelphia, 1850-1880," T. Hershberg, et al., "A Tale of Three Cities: Blacks, Immigrants, and Opportunity in Philadelphia, 1850-1880, 1930, 1970," *Journal of Hershberg, Philadelphia* の第五章と第十四章。 だが、Fishman は、中流層の郊外化をみた英米型と、この層が都心部に留まった仏などのヨーロッパ大陸型とを比較し、仕事世界と墮落した都会からの家族の分離と防衛を唱へ福音主義の両者の違いの原因を求めよう。

二 社会的流動性と地理的移動

以上のようなメトロポリスの成立過程と秩序形成とが、アメリカ労働者階級の存在様式と階級意識形成に対していかなるインパクトを与えたのかを、以下三点にわたって検討したい。まず最初は、モビリティの問題である。すなわち、世紀転換期に経済的上昇をとげ、インナーシティの外側に開発される住宅地に移動したり、そこで家を購入することが、当時の労働者階級にどの程度可能であったのかという問題である。

いくつかの数字をあげてみよう。ボストンでの社会的流動性を検討したサーンストロムによれば、一八五〇年代から八〇年代にかけて生れた者の中で、その労働人生においてブルーカラーからホワイトカラーへ上昇できた割合は大体四人に一人であった。内訳を詳しくみると、熟練層の四人に一人がその労働人生においてホワイトカラーへ上昇した。半熟練層では四〇％強が職業上の上昇を経験したが、ホワイトカラーへは六・七〇年代生れの者の二〇％と五〇年代・八〇年代生れの三〇％が上昇し、熟練層へは五〇年代から七〇年代生れの二〇％と八〇年代生れの一〇％の者が上昇した。不熟練層では約七〇％の者が職業上の上昇を経験したが、ホワイトカラーへは六・七〇年代生れの一六％、五〇年代生れの二四％が上昇し、熟練層へは六・七〇年代生れの二〇％、八〇年代生れの一二％が上昇をとげた。また、四〇年代から八〇年代に生れた者で、熟練工の父親をもつ息子の約四〇％がホワイトカラー職につき、半・不熟練労働者の父親をもつ息子の四〇％以上もがホワイトカラー職に、一四ないし二〇％が熟練職についた。さらに、一八九〇年当時のボストンの労働者の中にはアイルランド系が多く、彼らの第一世代の六五％が半・不熟練層、二五％が熟練層であり、専門職とホワイトカラー職についた者はわずかに一〇％であった。しかし、六〇年代から七〇年代に生れたアイルランド系第二世代では、半・

表(b)

Distribution of Total Wealth, 1890-1910(%)

Category	1890	1900	1910
Bottom 30%	0.22	0.26	0.69
Low-Mid 30%	4.50	5.64	10.69
Mid-Upper 30%	17.40	19.21	24.38
Top 10%	77.88	74.89	64.24

表(c)

Population Distribution by Residence, 1890-1910(%)

Residence	1890 (n=202)	1900 (n=177)	1910 (n=115)
Pedestrian City	80.4%	63.1%	45.6%
Old Suburbs	11.4	16.6	19.0
Streetcar Suburbs	4.6	10.6	14.4
New Suburbs	2.1	6.0	13.9
Far Suburbs	1.4	3.7	7.1

- (1) The "Pedestrian City," comprising those districts within 2 miles of Boston City Hall, which include Boston (center city), East Boston, South Boston, Charlestown, Roxbury, Allston-Brighton, and parts of Cambridge.
- (2) The "Old Suburbs," very much connected to the city of Boston, at distances of 2 to 3 miles, which include Dorchester, Brookline, Chelsea, and most of Somerville and Cambridge.
- (3) The "Streetcar Suburbs" of West Roxbury, Everett, southern Lynn, Medford, Quincy, Revere, and Winthrop.
- (4) The new suburbs of Arlington, Belmont, northern Braintree, Malden, Melrose, Nahant, Needham, Newton, Waltham, Wellesley, and northern Weymouth.
- (5) The far suburbs of Framingham, Hingham, Hull, Norwood, Reading, Salem, Scituate, Wakefield, Weyland, and Woburn.

表(d)

Homeownership by Area of Residence, 1890-1910(%)

Residence	1890	1900	1910
Pedestrian City	13.6	16.0	18.0
Old Suburbs	39.7	41.1	40.3
Streetcar Suburbs	61.0	66.6	66.4
New Suburbs	59.2	65.7	70.1
Far Suburbs	65.6	69.4	75.9

Edel, Sclar, and Luria, *Shaky Palaces*, pp. 139, 141.

不熟練層が三六%に著しく減少し、熟練層は二六%と変化しなかったが、専門職とホワイトカラー職につく者は三八%に増加した^①。以上のケースが示すように、職業上の地位上昇は広汎に認められ、特に第二世代の間でその割合は高かったといえる。

このような職業上の地位上昇と同時に、労働者が所有する財産も増加していた。ボストンにおける財産総額の分布状況を示す表(b)によれば、一八九〇年からの二〇年間に、最も富裕な一割の層を除いた各層がいずれもそのシェアを大きく増やした^②。また、ボストン在住の一三四名のサンプルを分析した結果によれば、一八九〇年当時所有する財産総額が二五〇〇ドル以上の者はわずかに九名にすぎなかったが、二〇年後には六一名にも増加していた。なかでも二五〇〇以上五〇〇〇

ドル未滿の財産所有者は三名から三四名へと大幅に増加した。^③

そして、以上みたような職業上の地位上昇と保有財産の増加とは、地理的移動を惹起する。「社会的差違を示したいという欲求は、地理的な区別を通してのみ実現できた」からである。換言すれば、「アグレッシブで、成功志向的流動性」と「防衛的で、家庭と結びついた繩張り意識」とを文化的特質とする合衆国においては、「仕事の上での地位上昇や財力の上昇は、必ず、より良い近隣への移動を伴わなければならない」のである。^④表(e)が示すように、一八九〇年からの二〇年間において、ボストン中心から二マイル以内の「歩き回れる都市」の地域は著しい人口流出をみた。九〇年当時、そこにはボストン人口の実に八〇%が居住していたが、一九一〇年にはその割合が約四六%へと激減した。流出人口は周辺部へと移動したが、大体の傾向としては、専門家や経営・管理者層が New Suburbs へ、ホワイトカラーが New Suburbs か Streetcar Suburbs へ移動し、熟練層は Streetcar Suburbs へ Far Suburbs へ、不熟練層は Old Suburbs へと移った。^⑤そして、この郊外化は、表(d)が示すように、特に New Suburbs と Far Suburbs における持家率の大幅な上昇を伴っていたのである。^⑥

別の数字をあげてみよう。一八八〇年にボストンに在住した約三五〇名のサンプルを検討した結果によれば、彼らの持家率は八〇年のわずか六・七%から、九〇年の一四・四、一九〇〇年の二四・五、一九一〇年の三四・五%へと急上昇した。そして、この持家率の上昇は郊外化に伴うものであった。すなわち、ボストンの中心からの彼らの住居の平均距離は八〇年ではわずか〇・八五マイルであったが、九〇年には一・二九、一九〇〇年には二・四六、そして一九一〇年には三・四マイルへとのびた。また、この三〇年間に人口密度は四分の一の減少をみせ、居住環境は改善されていたのである。^⑦

留意すべきは、メトロポリスの周辺部が、ある程度の経済力さえあれば、白人の誰に対しても開かれていたことである。階級とエスニシティとは相互に規定し合うが、郊外への脱出の決め手はなによりも経済力であり、生来的属性であるエス

ニシティは脱出の障害とはならなかった。そのため、インナーシティの居住者が、当時の高い社会的流動性の中で、郊外の持家という「アメリカの夢」を自分にも実現可能な目標と考えたとしても不思議ではないし、むしろ、そういう成功への夢をもたないことは「非アメリカ的」とみなされた。

たとえば、一八七〇年代と八〇年代のボストンでは、中流の上層が住んでいたロックスベリーにはアイルランド系の者が最も多く進出した。しかし、九〇年代には彼らに続いて、かなりの数のユダヤ系やカナダ系の人々もインナーシティから移り始めたのである^⑧。また、ロックスベリーやドーチェスターにあるファッシュョナブルな住宅地域で家を購入した富裕なアイルランド系住民もいたけれども、彼らアイルランド系の殆どは、中心にもっと近いサウス・ボストン、チャールズタウン、サウスエンドにおいて、スリー・デッカー（三家族用の三階建建物）を借りたり、古い連棟式住宅を購入した。これらのZ Eは、五・六〇年代に移っていたアメリカ生れの中流層にかわって、七〇年代からはアイルランド系の熟練層や小店舗経営者の世界になり始めたのである。サウス・ボストンの「レースのカーテンがかかった」家に住むアイルランド系住民はインナーシティのスラムから脱出できた人々であり、アメリカ生れで中産階級出身の社会事業家（ソシアルワーカー）の目からみれば、今では市民として自己を確立し、ブルジョワ的価値を受入れ、ワスプ的支配文化に順応し同化していた。サウス・ボストンは「セルフ・メイド・マン」の世界なのであった^⑨。

また、ウエスト・フィラデルフィアの北の地域は主に中流階級の郊外住宅地であったが、二〇世紀初頭に完成したマーケット・ストリート高架鉄道がフィラデルフィアのC B Dとこの地域を一分で結ぶに及んで、新住民が増加した。彼らは、一九世紀末に路面電車の導入とともに移住していた人々と社会経済的・民族的属性の上では変わらず、アメリカ生れの親をもつ白人か、ドイツ系・イギリス系・アイルランド系に属し、クラークや、簿記係、下級管理者などの中流層であった。しかしながら、一九一〇年以降、ロシア系ユダヤ人やイタリア系が流入を開始した。彼らは経済的上昇に伴ってインナーシティから脱出してきた人々であり、以前の住民よりやや富裕の度合は下がるが、主に熟練層と中流層に属してい

た。^⑩

以上のように、世紀転換期のアメリカ社会は、労働者や移民ならびにその第二世代のかなりの部分に経済的・社会的上昇の機会を与え、郊外への脱出と持家の獲得への門戸を開いたのである。そして、このような生活向上の具体的成果を保証できたからこそ、郊外化は、当時の支配的エリートが強く期待したソシアル・コントロールの機能を果たしたのであった。いわゆる革新主義的改革者は、密集と家族のプライベートシーの欠如とをインナーシティの主な害悪と考え、分散を訴えていた。同時にこの訴えは、労資対立が激化したこの時期には、持家に手が届かず、社会の中に何の拠り所ももてないような労働者が引き起す騒乱や社会不安に対する恐怖とも結びついていた。ニューヨークのスラムの悲惨な状態を告発したジャーナリストのジェイコブ・リース(Jacob Riis)や、ニューヨーク人口密集問題対策委員会ならびに都市・郊外住宅協会、シンシナティ市長ハント(Henry Hunt)らは、郊外と都心を結ぶ交通手段の開発と郊外化を都市・社会問題の解決策として強調した。^⑪ ポストンの路面電車網を統合したホイットニー(Henry M. Whitney)も、路面電車が労働者を都心の汚ないスラムや下宿から、周辺の陽光あふれる田園地帯へと引き出し、一乗り五セントの費用だけで都市周辺部を「微笑みあふれる田園的メトロポリス」にかえることができると主張し、州知事ラッセル(William Russell)らもその考えに賛同した。ポストンの有力なマグワンプの一人で、企業家のアトキンソン(Edward Atkinson)は、「インマン・ヒル・オブ・ランドすべての人々を土地所有者に」というスローガンを考えだし、模範的郊外住宅地の造成を計画して、ホイットニーに線路をのばしてくるように要請した。^⑫ また、一九〇一年の合衆国会産業委員会における証言で、シカゴのある建築請負業者は、「もし我々の労働者が家を所有しているなら、ストライキをおこそうとはしないだろう」と述べていた。別の人物も、家の所有が、炭鉱労働者の「真っ当で、正直で、勤勉で、堅実な人生を送る」欲求や傾向を示すものと証言した。^⑬ さらに、当時の著名な都市・住宅改革者ベラー(Lawrence Veiller)は郊外化を勧め、次のように述べた。「人が自分自身の家をもつ場合には、節約し儉約し、市民としての義務を果し、政治の真の参加者となろうとする動機を強くもつことになる。民主主義は、テネメントに住む

人々で構成される国においては根づかなかつたし、生き残ることもできないであろう^⑩と。合衆国においては、少数の地主と多数の借家人を生みだしたヨーロッパの経験はくり返されてはならないのである。

このように、郊外化と家の所有は保守的影響をもたらすと認識されていたが、実は当時、持家所有者のかなりが金融機関、特に住宅金融共済組合から借金をしていた。たとえば、世紀転換期のボストンにおいては、すべての持家の借金の約半分までがローンで賄われていた^⑪。抵当で縛られた労働者が「社会的安定の柱」であったことは否定できない。フィラデルフィアのある編集者によれば、彼らは「よほどの事情がない限り、自分たちの家を失うのをおそれて職場を放棄したりはしない^⑫」し、「デマゴグは、儉約と犠牲によって財産を獲得した住宅金融共済組合員の会合においては、影響力をもたない^⑬」からである。住宅金融共済組合を通じて家を購入すれば、近隣への愛着が生まれてその発展のために活動するようになり、「勤勉ならびに法と秩序という目的や、善良な市民であること、そして健全で保守的な政治に賛同するようになる^⑭」のである。

一九一二年に全国住宅協会が、労働者の持家は奨励されるべきかについてシンポジウムを開催した。殆どの発言者が不動産所有の拡大に賛同する中で、異論が一つ出された。すなわち、長年貯金をして家を購入したり、まだ家の代金を完納していない労働者は雇用主に対して弱腰になり、ストライキなどを通じて賃上げや条件改善を獲得できないというものであった。この異議に反論を加える者は誰もいなかった。討論の中で、ペンシルヴェニア鉄道会社は、従業員が「家を所有しているのです、ストなど打てない^⑮」から、ストライキがおこる心配をしていないとの指摘がなされた。商工会議所などを代表する発言者は家の所有が「社会的責任」や「安定と責任」、「節約や儉約」をもたらずと考えていた^⑯。以上のように、経済的・社会的上昇の機会の広汎な存在が可能にした郊外化と持家の所有とは、支配的エリートが期待したように、労働者を保守化させ、闘争に参加するのをためらわせ、階級意識を鈍化させたのである。

ここで注目すべきは、住宅金融共済組合を利用できたのは、クラークや教師、熟練工ら、ホワイトカラーならびにブル

「カーラ上層であった点である。たとえば、フィラデルフィアの共済組合は、一〇〇〇から二五〇〇ドル程度の価格の家に対するローンの対象者として、一八九一年当時で平均週給二五ドルを稼ぐ者を想定していた。^⑮ このことは大きな意味をもつ。持家を獲得する最も有利で一般的なルートから不熟練の都市貧民は排除され、彼らと熟練層との間の格差が、生活の面においても、拡大していくからである。あるいは、より一般的に言って、住宅金融共済組合を利用できるかどうかとは無関係に、労働者階級内部の格差と亀裂そのものが、「開かれた」郊外の存在の下では、地理的に反映されて空間的形をとるのである。住宅金融共済組合はこの傾向を一層促進したといえる。

ミラーによれば、シンシナティのZ Eにおいて最も特徴的な組織は、「民衆の銀行」と呼ばれた住宅金融共済組合であった。一九〇九年にはその数が二二〇近くにも及んだ共済組合は何らかの利害関係をもった者を約八万名も擁し、抵当の少くとも七五%を設定し、約六万戸の購入に関係したという。かなりの数の労働者がこの組合を利用しており、シンシナティ商工会議所会頭によれば、彼らの家は「何年にもわたって積み立てられた個人貯蓄を表わしている」ので、彼らは「自分たちの都市の繁栄に関心をもつて」いた。^⑯

また、このZ E内の組織として、約三万五〇〇〇名の熟練労働者を組織した中央労働評議会セントラルレイバーカウンシル(A F L所属)は、「組織せよ！ 煽動せよ！ 教育せよ！」とアピールすると同時に、儉約、個人主義、社会的上昇の追求を強調した。そして、家の所有者はコミュニティで尊敬と地位をかちとることができるから、すべての組合員は自らの家を持ちたいという願望をもつべきだと訴えた。さらに同評議会は、労働者の子供が「実業家の子供のようにりっぱに育ち、りっぱで尊敬される社会のメンバーになれるように」、子供を通学させることを求めた。他方で、この中央労働評議会は、インナーシティでの犯罪や、非衛生的状態、テナメントの劣悪さを憂えていた。そして、ヨーロッパの「貧民階級」が「まともなアメリカの労働者」と接触するのを嫌って移民制限を主張し、移民の七割を占めるイタリア、オーストリア・ハンガリー、ロシア出身者の約半数は技能や定職をもたず、好ましくないと決めつけ、彼らへの軽蔑と敵意を隠さなかった。^⑰

同様に、デトロイトにおいても、アメリカ生れや、イギリス系、カナダ系の熟練工や組合幹部は、ホワイトカラーや小規模実業家と同じ地区に住んでいた。彼らは中産階級的な友愛団体や社交クラブや教会に所属し、時にはそれらの役員さえ務めたのである。^②

シンシナティとデトロイトの熟練労働者が示した排他性なり保守性は、労働者階級内部の亀裂を表わすものであった。この問題について、ティジェルの研究がサンフランシスコの興味深い状況を見事に明らかにしている。一九世紀末のサンフランシスコにおいては、熟練工の大工と半熟練の御者チムスターとは、熟練技能の希釈化と企業家への上昇の機会の減少のために、不熟練層とともに、階級としての一体性を共有し、彼らと資本家階級との距離が拡大した。その結果、市内のマーケット通りが労働者を分断する境界線となった。この通りの北西部に開発されていく地域には上・中流層が住み、南側には労働者地域が発展し、サンフランシスコは階級によって大きく二分されたのである。

しかしながら、これと同時に、大工たちが組織化によって熟練技能を保持し、仕事規制と高賃金を確保したことによって、彼らと御者ら未組織の半熟練層や不熟練層との間に、ライフスタイルの上でも大きな差違が顕在化していく。たとえば、一八八〇年当時、大工と御者、不熟練層は、世帯主の比率がそれぞれ五四、五三、五二%であり、二八才から三七才の間に結婚する割合も五四、五一、五三%、下宿人・間借人の割合も三一、二八、三四%であって、彼らの間に差は無かった。しかし二〇年後には、大工、御者、不熟練層は、経済的格差を反映して、世帯主の割合がそれぞれ五七、三九、三七%となり、前述の期間に結婚する割合も五六、四九、三七%に、下宿人・間借人の比率も二四、三〇、三九%となって、大工と他の二つのグループとの間には大きな差違が生じるようになった。^③

そして、いち早く結婚して家族を形成し、安定した大工は、八・九〇年代に開発が進む周辺部の一つ、マーケット通りの南西部へ移動した。すなわち、八〇年当時では、大工、御者、不熟練層の中で都心部に居住した割合はそれぞれ四七、四三、五八%であり、熟練度と居住地の間に直接的関連はなかった。しかし、その後の二〇年間で都心部から脱出できた

のは主に大工であり(四七から三一へと一六%も減少)、御者(わずかに五%の減少)と不熟練層(変化なし)は都心部に留まったのである。また、周辺部における家族形成という点からみると、大工、御者、不熟練層の家族で周辺部に住む割合は、八〇年当時は、それぞれ五八、五八、六一%と全く差はない。しかし二〇年後には、大工の場合には二八ポイントも増えて八六%に達し、他方、御者の場合にはわずかに九ポイント増えただけであり、不熟練層ではその割合は変化しなかった。大工の家族の四割強がマーケット通りの南西部に住み、また三割もが上・中流層の住む北西部にも居住した。サンフランシスコにおいても、労働者階級内部で進行する分裂がはっきりと空間的形をとったのである。

さらに、持家率(一九〇〇年当時)についても、御者と不熟練層がそれぞれ一三と八%であったのに対し、大工は二九%と他のグループを大きく引き離していた。熟練大工の生活はあらゆる面でかなりの改善をみせ、半・不熟練層との差は大きく拡大していった。

労働者階級内に広がった以上のような社会的・地理的断絶は、労働運動の路線にも当然反映された。大工を中核とする建築職種評議会は所屬メンバーを「納税者」、「世帯主」、「市民」と呼んで他の労働者層と区別し、保守的で排他的なビジネス・ユニオニズム路線をとった。サンフランシスコの大手の資本家を結集し、オープン・ショップをはかる雇用主協会と、組織化を目指した、御者に代表される半熟練層とが対決した一九〇一年の労資抗争においては、建築職種評議会はストライキ労働者を支持しなかった。それどころか、建築資材を運ぶ御者のストのためにレイオフが建築熟練工の間に拡大すると、同評議会は二重組合を結成し、この御者組合を解散に追い込むことさえためらわなかった。

さらに、組織化をようやく実現させた半熟練層を中心にして結成された統一労働党が、一九〇一年の市長選挙に候補者をたて、政治への直接的関与を嫌うビジネス・ユニオニズムに挑戦した時、建築職種評議会は統一労働党と鋭く敵対した。「何千という財産所有者と納税者を代表」する同評議会は、彼らの利益を守るためには「通商的・商業的・金融的」勢力と提携し、「安全まで注意深い」候補者を支援する、という反労働的決議を採択した。同評議会のこうした言動は明白

に資本の側に立つものであり、いわゆる労働貴族の出現を示すものであった。^④ 以上のように、労働者階級内部の労働の場における差違は、居住地の分離ならびに生活の場におけるライフスタイルの相違、さらには労働運動の路線対立をも生みだしていった。シンシナティの中央労働評議会やデトロイトの熟練工・組合幹部と同様に、サンフランシスコの大工や建築職種評議会の排他的で保守的な立場は、労働貴族的熟練層の生活の社会的現実に対応するものであったのである。

こうして、アメリカ労働者階級内部の格差と亀裂が居住地域に反映された。半・不熟練層がインナーシティにとり残される一方、熟練層はホワイトカラー層とともにZ Eで家を所有し、「中産階級的」生活を享受した。郊外化と個人化された形で労働者の間に拡大した不動産所有とは、住宅・土地問題がたとえば土地の公有化や公営住宅建設の要求という形をとって、私的所有の原則そのものを問題にするまでに先鋭化されることを防ぎ、労働者の少くとも一部を私有財産の原則につなぎとめた。^⑤ 労働の場から「一応」分離された生活の場における、財産（不動産）所有の上に築かれた家庭生活なるものは、財産所有者としての労働者に対して、市民生活の無階級性という感覚を植えつけ、労働の場で生じる階級的アイデンティティとは多くの場合対立する地域的・民族的帰属意識を醸成したのである。

- ① Stephan Thernstrom, *The Other Bostonians: Poverty and Progress in the American Metropolis, 1880-1970* (1973), Table 4, 9 (p. 65), Table 4, 10 (p. 67), Table 5, 3 (p. 89), Tables 6, 9 and 6, 10 (p. 131-32).
- ② M. Edel, E. D. Sclar, and D. Luria, *Sticky Palaces: Homeownership and Social Mobility in Boston's Suburbanization* (1984), p. 141.
- ③ Daniel D. Luria, "Wealth, Capital, and Power: The Social Meaning of Home Ownership," *Journal of Interdisciplinary History*, 7-2 (1976), p. 279.
- なす 一八六〇年から九〇年の間では、消費着物価の下落を主な理
- 由として、労働者の実賃金は五〇%近く上昇した。Bruce Laurie, *Artisans into Workers: Labor in Nineteenth-Century America* (1989), p. 127.
- ④ Samuel P. Hays, "The Changing Political Structure of the City in Industrial America," *Journal of Urban History*, 1-1 (1974), p. 10; Danielson, *op. cit.*, pp. 6-7.
- ⑤ Edel, et al., *op. cit.*, p. 139; Luria, *op. cit.*, Tables 4, 5, 6 (pp. 271-72). 人口の周辺部への急速な移動は「バラカン」によって確認される。Howard Gillette, Jr., "The Emergence of the Modern Metropolis: Philadelphia in the Age of its Consolidation," in Cutler and Gillette, *op. cit.*, p. 15 を参照。

ing Cultural Systems: Detroit Workers, 1875-1900," in H. Kell and J. B. Jentz, *German Workers in Industrial Chicago, 1850-1910* (1983), p. 61.

② Jules E. Tygiel, "Workmen in San Francisco, 1880-1901," unpublished Ph. D. diss., Univ. of California, Los Angeles, 1977, pp. 182-83.

③ *ibid.*, pp. 244-86.

三 労働者闘争と工場の分散

階級による都市空間の分離のプロセスは、アメリカ労働者階級をインナーシティとZ Eとに分断していくと同時に、メトロポリスの特定の地域に労働者を集中させていくプロセスでもあった。元来、都心部への労働者の集中は、大量の安い労働力を供給した点で、都市における工業発展を可能にした要因の一つであった。しかしながら、一九世紀末にもなると、この労働者の集中が円滑な資本蓄積への障害となり始める。なぜなら、労働者居住地域において、教会や、運動クラブ、消防団、相互扶助組織、酒場、あるいは組合組織を基盤にして、対抗的な労働者階級文化が形成されてくるからである。この対抗的労働者階級文化は、社会的上昇と郊外での持家の夢という個人的成功倫理に対抗し、労働者相互の対立と亀裂を乗り越えて連帯を志向し、階級的アイデンティティの下に労働者を結集しようとするものであった。労働者の都心部への集中と抵抗のサブカルチャーの醸成とは、郊外住宅地へ脱出した支配的エリートに対して不気味さと脅威を与え始め、彼らにとって労働者居住地域は巨大な「未知の世界」となったのである。そして、熟練技能を抵抗の武器にして職場での支配権を守り、賃上げを確保しようとする労働者の闘いは資本の攻勢をうけて激化し、一八八〇年代後半から労働者闘争が高揚するが、この闘争が実はメトロポリスの構造に重要なインパクトを与えるのである。

一八九〇年代までは製造工場はC B Dの、鉄道や港などに近い工場地帯に集中していた。しかし、九三年恐慌が終了し

④ *ibid.*, pp. 295-377.

⑤ D. Harvey, *op. cit.*, p. 272. 世紀転換期には、貧困や恐慌の原因である土地私有に反対し、土地を共有財産にするために土地に対してのみ課税することを求めたHenry Georgeの単一税運動や、マンウオーキーをなじめたふたごの都市におけるMunicipal Socialismの動きがあった。

た直後の九八年から九九年以降に、工場は突然周辺部へ脱出を開始した。当時最大の二三の工業中心地の一二において、九九年から一九〇九年にかけての製造業における雇用の増加率は、C B Dでの四一%に対し、周辺部では九八%と二倍以上であった^①。この時期には周辺部で工業地区や、インディアナ州ゲーリーに代表される衛星工業都市が急速に誕生している^②のである。

この工場の脱出の理由として、生産や流通の過度の密集状態が引き起す資本蓄積への逆機能的働き、具体的には地価高騰と交通麻痺等があげられる。しかし、労働者闘争の高揚もその大きな理由の一つであった^③。工場経営者は特に、闘争の戦闘的高まりが従業員の間へ伝播するのを憂慮していた。当時メトロポリスの周辺で誕生した衛星工業都市を調査していたテイラーに対して、路面電車の激しいストライキを経験したある都市の工場長は、ストライキ労働者が工場の横を行進する度に、従業員の間には熱情が広がると嘆いた。彼は、もし工場が郊外へ移されるなら、労働者はそれ程ひんぱんにそういう熱情に感染はしないだろうと述べていた。企業家たちによって「衛星工業都市は、慢性的『トラブル』の治療のため一種の隔離病院として期待され」たのである^④。

一九〇〇年から〇二年に開かれた合衆国議会産業委員会での証言の中にも、同じ嘆きがきかれる。シカゴのある経営者は、もし設備投資の額が大きくなければ、多くの企業が「ここで起っている労使紛争を理由にして、すぐにでもシカゴを離れるでしょう。……事実、シカゴでは過去二ヵ月の間に、この地で操業していた非常に大きな企業のいくつかが出て行ってしまいました」と語った。別の請負会社社長も、ここ数年間シカゴで起っている労使紛争やストライキのために外部からの資本投資が行われず、また従業員が紛争やストに関わることを恐れて工場所有者はシカゴを離れていると指摘し、その結果シカゴ周辺の「規模のより小さな町がこれらの製造工場を受入れていきます」と証言した。さらにニューヨーク州調停・仲裁局長は、「人口の大変集中した地域から離れて孤立している工場では、都心部においてよりも組合に組織されることは少ないと言えますか」という質問に、「はい、その通り」と答えた。また、「あなたの州で、組合の組織化を逃れ

るために、工場を孤立させているようなケースを知っていますか」という質問に対して、同局長は「そのような目的をもって工場は立地されております」と返答した^⑤。

工場が周辺部に立地されると、その工場で働く労働者の住居は大体徒歩で通勤可能な範囲内におかれることになる。フィラデルフィアのケースを検討したグリーンバーグによれば、中心から四マイル離れたところに完成した新工場は生産技術が高度な資本集約的産業のものであった。そして、この工場近くに居住した労働者は主に、この種の工場が必要とする熟練技能をもっており、新移民や黒人よりはむしろ旧移民であり、その約半数が都市部のものより新しくして質の高い家を所有していた^⑥。また、ウォーカーによれば、工場経営者は、郊外へ移る際に、技能を習得した労働者を一緒に連れていき、土地や家を提供したり、ローンを与えたりしたという^⑦。周辺部の工場近くに住んだ労働者が主に熟練工であったと一般化するにはまだ証拠が不十分だが、ともかく彼らは、労働と余暇とコミュニティを統合した労働者階級文化の栄える都心部から離れざるをえなかった。そのため、就職の情報を教え合ったり、労働条件を比較したり、社会活動を共にする他の工場の仲間や組合オルグとの接触は少なくなり、階級的連帯へと向かう絆は断ち切れ、組織化は進展しにくくなる^⑧。たとえば、マサチューセッツ州フォールリバーでは、一九世紀末に中心から遠く離れて綿織物などの大工場がいくつかの地域に建てられ、その周辺に労働者住宅の集落が形成された。都心までの遠い距離と、長時間労働、極度の疲労をもたらず労働条件のために、周辺部の労働者が組合事務所などのある都心まで出かけて、都心近くの仲間と共に諸活動に参加し、労働者クラブや酒場で交流を保つことは困難となった。彼らは各々の近隣に留まり、近隣の住民とのみ付き合った。そのため、ストライキ等が呼びかけられた時に、最後に参加し最初に脱落するのは、周辺部の労働者であった。組合活動家の間では、遠くに住む労働者をいかにして運動に参加させ、積極的にさせるかについて議論がたたかわされた。そういう中で、一八八〇年代後半から移住してきたフランス系カナダ人に続いて、ポルトガル系とポーランド系移民も流入して、以前の住民で、熟練層を形成していたイギリス系・アイルランド系人口に加わり、フォールリバーの民族

構成は多様になった。その結果、分散していた労働者集落はそれぞれ、ある特定の民族グループが優勢な自己充足的地域として発展し、相互の孤立と分断が深まった。また、イギリス系・アイルランド系中心の労働組合運動は、資本との厳しい闘争の中でフランス系カナダ人を統合することに成功していた。しかしながら、一九〇四年—〇五年の織物工業の不況に直面した資本による労働強化の圧力と新来のポルトガル系・ポーランド系移民からの脅威とをうけて、組合運動は産業別組合主義的柔軟路線から、熟練工の利益のみを守ろうとする職能別組合主義へと後退してしまい、新来の不熟練移民は切り捨てられた。こうして、フォールリバーにおける労働者コミュニティは、居住地の分散がもたらす相互交流の欠如とエスニシティによる分断の圧力をうけて、アトム化していったのである。^⑥

一九世紀的な一極集中型工業都市の構造が、二〇世紀的な分散型メトロポリスの構造へと転換するためには、中間層以上の住民の郊外への脱出とともに、工業生産部門と流通部門のCBDから周辺部への分散が不可欠であった。^⑦そして、この周辺部で操業した工場は主に、資本・エネルギー集約的製造業に属する大工場であった。いくつもの巨大な機械設備を生産工程の流れに沿って効率的に配置するためには、広い面積の土地が必要であり、狭く、過密化し、土地価格が高い都心部は以上のタイプの工場にはもはや適さなくなっていた。

また、以前は生産部門と同じ建物内におかれていた管理部門は、企業の巨大化に伴って肥大化して生産部門より分離され、銀行や保険会社等の関連業種が集まるCBDにおかれた。この部門で働くホワイトカラー層は、CBDの地価高騰の産物であり、この時代の象徴的建造物である摩天楼のオフィスで労働し、路面電車を利用して郊外の家へ帰って行く。こうして、周辺部の工場は、CBD内の管理部門によって統括・管理されるとともに、都心部の労働者階級が与える敵対的影響から隔離されたのである。

⑥ D. Gordon *op. cit.*, p. 47; Graham R. Taylor, *Satellite Cities: A Study of Industrial Suburbs* (1915, 1970), pp. 5-6.

⑦ 他例として、シカゴの周辺部 Chicago Heights, Hammond, East Chicago, Argo, Pennant, East St. Louis, Wellston, 等

チェスターは Chester, Norristown, シンナトナは Norwood, Oakley である。Graham Taylor, Adna Weber, E. E. Pratt は当時の指導的都市問題専門家は、工場と郊外への分散、すなわち雇用機会の分散を、都市部への密集や害悪に終止符を打ち最善の手段とみなした。Walker, "The Suburban Solution," p. 380.

- ③ Gordon, *op. cit.*, pp. 45-46.
- ④ Taylor, *op. cit.*, pp. 23, 25.
- ⑤ Gordon, *op. cit.*, p. 49; Gordon は「労働者闘争の高揚が一八八〇年代後半から始まっているのに、工場の分散が一〇年近くも遅れた理由として、八〇年代後期の利潤低下と九三年恐慌、ならびに九八年以降の資本集中と合同による移転資金の確保をあげている。Ibid., p. 50.
- ⑥ Stephanie W. Greenberg, "Neighborhood Change, Racial

四 都市政治と労働者

メトロポリスの成立過程と秩序形成とが、労働者階級の存在様式ならびに階級意識形成に与えたインパクトを検討する時、都市政治との関係をやはり無視できない。労働者の都市への集中と労働者居住地域の拡大が、都市政治に対する労働者の影響力を少なくとも潜在的に高めるからである。

まず指摘したいのは、労働と生活の場における組織原理の違いである。産業資本主義の発展は、第一章でふれたように、労働過程の再編成と工場制度の成立を通じて、労働の場と生活の場を分離した。このことは、労働者の闘争が、表面上は別箇のものであるかにも見える二つの闘いに分離されることを意味する。一つは、労働の場における、賃金や労働条件をめぐる闘いであり、もう一つは、生活の場における、商業資本や家主に対しての生活のコストと条件をめぐる闘いである。この労働と生活の分離は資本主義制度が押しつけるいわば人為的な分離であり、ブルジョワ的改革者は労働と生活、生産

Transition, and Work Location: A Case Study of an Industrial City, Philadelphia 1880-1930," *Journal of Urban History*, 7-3 (1981), pp. 276, 294, 298.

- ⑦ Walker, "A Theory of Suburbanization," p. 401.
- ⑧ Taylor, *op. cit.*, p. 101.
- ⑨ John T. Cumbler, "The City and Community: The Impact of Urban Forces on Working Class Behavior," *Journal of Urban History*, 3-4 (1977), pp. 433-38; idem, *Working-Class Community in Industrial America: Work, Leisure, and Struggle in Two Industrial Cities, 1880-1930* (1979), Chapters 7-11. 一九〇〇年のフェールビューの人口は約一十二万である。
- ⑩ Walker, "The Suburban Solution," pp. 153-55, 370-71.

と消費の関連を拒否して、後者を個人的領域に属するものとし、生活の場における階級の問題の存在を極力否定した。^①しかしながら、実はアメリカ労働者階級自身もこの分離を大筋において受入れ、労働と生活の場における闘いを階級原則の下で統一させはしなかったのである。

カッツネルソンによれば、アメリカ労働者階級は自らを労働の場では労働者とみなしたものの、生活の場ではエスニックスと規定した。すなわち、仕事においては、関心が政党とつながりのない労働組合の構築と労働条件の改善とに狭く限定されていたとはいえ、労働者はともかく階級意識的であったが、仕事を離れば、教会や政党組織などを基盤にした民族的・地域的帰属が支配的となった。要するに、アメリカ労働者は、労働の場においてはビジネス・ユニオンイズム、生活の場においてはエスニック・ポリティックスあるいはマシーン政治という異なった組織原理で引き裂かれたのである。^②

このアメリカ的特徴が生まれた理由として、カッツネルソンは次の二点をあげている。まず、合衆国では、英仏と比較すると裁判所が労働組合に寛容であり、職場の不満が職場において取り上げられ解決されることが可能であったため、パンとバターの問題をストライキのような非政治的手段で解決しようとした職能別組合が労働運動の主流となった。次に、ヨーロッパ諸国と異なつて、白人成人男子に早くから選挙権が与えられた結果、合衆国の白人労働者は市民として政治参加し、階級的観点から政治を捉えなかつた。政治的編成は専らコミュニティに基礎をおき、労働組合との直接的な組織的つながりをもたなかつた。政治は、労資の階級的対立の政治ではなく、民族的・地域的コミュニティ相互の競争の政治となったのである。たとえば、工業化によってその状況が悪化したアメリカ生れでプロテスタントの職人労働者は、アイルランド出身のカトリック移民を産業資本主義勃興のシンボル(または原因)として敵視し、新しい生産体制と秩序への抵抗をアイルランド移民居住地の拡大反対という形で表現した。こうした民族的・宗教的抗争は地域的帰属意識と地域内の教会をはじめとする制度や組織の重要性を高めるとともに、政党の組織的基盤を提供したのである。^③

アメリカ労働者階級がビジネス・ユニオンイズムとマシーン政治という別々の原理で引き裂かれたという議論を少し敷衍

してみよう。労働の場においては、一九世紀の末から労働者以外の階級を排除したという点では階級的であるが、半・不熟練層をも排除し、熟練工の利益を主に追求する点では非革命的で経済主義的な運動が、職能別組合を結集したAFLを中心に展開されていく。

他方、生活の場においては、労働者は政治マシーンの中に中産階級やエリートとともに統合されて、階級ではなくエスニシティとコミュニティを基盤にして政治参加し、公職や施設やサービスの分配を争う。政治マシンは非公式の福祉制度や、補助金ならびに公職任命権、移民の政治的権利擁護などを通じて労働者にアピールし、漠然とした「階級的感^④」を、より明確に階級を基盤とする政治意識へと昇華させるのではなく、現存の党派的忠誠と同一化する。「換言すれば、マシーン政治は労働者のいくつかの要求に応えはしたけれども、「階級意識的なやり方」で応えたのではなく、「階級意識を砕いてコミュニティ意識にかえ」たのである^⑤。

もちろん、職能別組合と政治マシーンだけが一九世紀後期において労働者を結集した組織ではないし、労働条件改善と二大政党を通じての公職任命やサービスだけが彼らの要求ではなかった。しかしながら、協同組合、不熟練層の組織化や、独立の政治行動、労農同盟による政治闘争などの他の選択肢は次から次へと破産していった。その結果、労働者の諸要求を吸収するものとして、職能別組合と政治マシニングが一八八〇年代と九〇年代に制度化されていき、階級闘争を分断し、封じ込めてしまう合衆国独特の方式が確立するのである^⑥。

ボストンを例にとろう^⑦。この地のアイルランド系労働者は民主党に忠誠を誓っており、民主党のアイルランド系政治ボスは、労働者住民への細かな日常的サービスと、自らが示した社会的上昇によって権力と権威を保持した。

また、アイルランド系労働者は労働騎士団のラディカルな改革主義よりもAFLの保守的ビジネス・ユニオンズムを選択していくが、その転回点となったのが一八八六年である。同年、騎士団と統一労働党^{ユニオナリスティック}の支持をうけたジョージ・マクネイル(George McNeill)がボストン市長選挙に挑んだ。しかし、二年前にアイルランド系カトリックとしては初めて市

長に選出されていた現職のヒュー・オブライエン(Hugh O'Brien)の前にマクネイルは敗退した。労働統一戦線を組もうとしたマクネイルは、アイルランド系労働者と民主党の紐帯を断ち切ることに失敗したのである。彼の同志で騎士団のリーダーであったフランク・フォスター(Frank Foster)は衰退していく騎士団を見限って、AFL結成に力を貸し、ボストンの労働運動を指導していく。^⑥

一八九三年恐慌時のボストンでは、失業者や社会主義者の運動が活発化し、民主党支持の労働者もラディカリズムやピュリズムに関心を寄せ始めた。AFL内でも、「あらゆる生産及び分配手段の人民による集産的^{コレクティブ}所有」を要求した『政治綱領』を支持する勢力がかなりの力をえたし、ボストンの近くのハヴァヒルとプロックトンでは、ラディカルな産業別組織、長・短靴工組合が社会主義者を市長に当選させることになる。この不安定な状況下で、フォスターは、ボストン中央組合連合とマサチューセッツ州労働連盟において『政治綱領』支持派を敗北させ、AFLの社会主義路線拒否を明確にした。^⑦

他方、賃金で八万ドル相当の市の仕事を支配するウェストエンドの政治ボス、マーティン・ロマズニー(Martin Lomasney)をはじめとする民主党のアイルランド系ボス達は、恐慌下で苦しむ労働者に各種のサービスを提供した。また、九六年から九九年まで市長を務めた民主党のジョシア・クインシー(Josiah Quincy)は、市の仕事が最も安い賃金を支払う請負業者に委託されるために組合の怒りを買っていた契約システムを廃止して、市が組合労働者を直接雇用する制度を導入したり、公共事業部を拡大して仕事を組合員にまわした。さらに、クインシーは遊休の印刷工場を買上げて市の所有とし、組合員の印刷工を雇用し、有給休暇や八時間労働など当時では最高の条件を保証して、労働組合に大きな配慮を示した。以上のような民主党の対応が労働者を民主党につなぎ留めたことは言うまでもない。ボストンでは、アイルランド系政治ボスが公職任命や各種サービスの提供を通じて労働者を民主党の下に結集し、親労働的民主党に対してAFL組合も支持を与えることをためらわなかった。民主党とAFLはいわば二人三脚の形で、ボストンの労働者を民族意識と仕事・賃金意

識へ方向づけていたのである。

以上のように、アメリカ労働者階級は労働と生活の場における闘いを、階級的原則の下で、統一させなかった。労働者に公職とサービスを提供し、政治権力への接近を許す政治マシンは「奴ら」ではなく「我々」であった。政治を階級の視点から捉えることは困難であり、階級的視点は労働の場に限定された。しかも、労働の場に限定された階級意識とは、アメリカ労働運動の主流においては、保守的な仕事・賃金意識以上のものではなかったのである。

さて次に、労働史と都市史の架橋という観点から都市政治を考察する時、集権化のインパクトを取り上げねばならない。ヘイズによれば、「歩き回れる都市」においては、人は他者の目を無視し、他者の承認ないし非難から免れて暮らすことができなかった。支配的エリートが、コミュニティ全体に対して許容しうるパターンを設定し維持していた。この段階ではまだ明確に「社会的差違が地理的区別として反映されていないので、中・下層階級の人々は、その政治的見解を効果的に展開し表現することがなかなか困難であった。」^⑩ それゆえ、支派的エリートが市全体を単位とする選挙において議員に選出され、政治権力を掌握していた。

しかしながら、都市化とメトロポリス形成の過程で社会的差違が地域的特徴として現われてくると、階級やエスニシティの点で、独自の特色を有する各々のコミュニティは自らの代表をもつことを要求し、市単位代議制にかわってウォード(ward区)制が導入された。クレップナーによれば、この変更は、「地域共同体という古い感覚が失われて、確認可能な、別箇の、時には対立する利害関係が出現し、都市の経済的・空間的変質の進行に伴って地域的特殊性をおびるようになったことを象徴するものであった。」^⑪ ウォード単位で選出される市会議員あるいは教育委員は、各自のウォードを代表し、分権化が進行する。そして、都市が膨張し郊外化が進むにつれて、中・下層階級が居住するウォードの数は増加し、この層から選出される議員らが増える。こうして、たとえば一九〇〇年のピッツバーグにおいては、「典型的なウォード選出の市会議員は、中小実業家——小売商人、葬儀屋、不動産業者、地域銀行頭取など——か、クラークや熟練工か、不熟練

労働者」であり、労働者階級も政治的発言力をもつようになったのである。

このため、下層の者にも政治的発言権を許すようなウォード制を破棄し、政策決定の集権化を行ない、自らに望ましい公共政策を実行しようとする支配的エリートの巻き返しが始まることになる。革新主義的改革者は政治マシーンを痛烈に攻撃したが、それは、以前の支配的エリートにかわって権力を掌握したボスとそのマシーンが、特にインナーシティのウォード内の移民コミュニティや低・中所得層の要求を市政へ反映させる媒体であったからである。改革者は、マシーンとボス政治反対を通じて、分権的ウォード制そのものとその後にある中・下層階級の政治的影響力とに攻撃を加えたのであり、市の政策決定者の階級の出自をかえようとしたのであった。^⑬政治マシーンが労働者の票を支配しようとしたのに対し、革新主義的改革者は労働者の政治権力を縮小しようとしたわけである。そのための方策が、専門化であり、市長の権限強化や議員定数の削減であり、選出ではなく任命による人事や、市単位代議制、中小都市におけるコミッション制とシティ・マネジャー制であった。^⑭

なかでも、ウォード制から市単位代議制への移行による集権化は大きな影響を与えた。ウォード制下のピッツバーグでは、市議会と教育委員会の三八七名のメンバーの中で、わずかに二四%がエリート層を代表しており、雑貨屋をはじめ、酒場や薬局の主人、クラークや簿記係、そして熟練・不熟練労働者が七〇%近くを占めていた。しかし、一九一一年の改革の結果、議員定数は二七から九に減り、市全体から選出されることになった。また、各ウォードの教育委員会が廃止されて、権限は中央の委員会に移り、委員定数も一五に減少し、しかも委員は民事訴訟裁判所判事による任命となった。新しく選出された議員と教育委員の中には、中小実業家やホワイトカラーは一名も選出されなかった。鉄鋼関係の職能別組合幹部が双方に一名づつ選出されたものの、議員の中の六名は上流階級の大実業家、二名が医師であり、教育委員の中の一〇名は大実業家、三名が上流階級の婦人、一名が医師であった。^⑮こうして、ウォード制の廃止と市単位代議制の導入により、労働者階級の政治的発言力は封殺された。支配的エリートによる集権的支配をめざした市政の構造改革は、民衆

の自治能力とデモクラシーに対する不信に基づいており、構造改革の後に導入された、経費節減や福祉とサービスの切り詰めなどの効率志向の政策は、都市貧民や労働者に大きな犠牲を強いるものであった。^⑨

- ① Harvey, *op. cit.*, pp. 266-67; Walker, "The Suburban Solution," p. 161.
- ② Ira Katznelson, *City Trenches: Urban Politics and the Pattern-ing of Class in the United States* (1981), pp. 18, 52-54.
- ③ Katznelson の「チネッレ」は、イギリスの労働者は自らを労働と生活の両方において労働者である、イギリスやオランダの労働者はその両方において自らをオランダマンと規定したところ。
- ④ *ibid.*, pp. 58-67.
- ⑤ Richard J. Oestreicher, "Urban Working-Class Political Behavior and Theories of American Electoral Politics, 1870-1940," *Journal of American History*, 74-4 (1988), p. 1272.
- ⑥ Walker, *op. cit.*, p. 381. シカゴのメイトランド系労働者を素材として、民族的紐帯と階級意識との関係を追求した精緻な研究として、松本悠子「キルネマド・オアシスにおける移民労働者の世界」『史林』七一―三、一九八八年が著る。
- ⑦ Martin Shefter, "Trade Unions and Political Machines: The Organization and Disorganization of the American Working Class in the Late Nineteenth Century," in I. Katznelson and A. R. Zolberg, *Working-Class Formation: Nineteenth-Century Patterns in Western Europe and the United States* (1986), pp. 197-99, 252-76.
- ⑧ Green and Donahue, *op. cit.*, pp. 51-54, 72-93.
- ⑨ ホントンの労働騎士団については、拙稿「労働騎士団 その思想と行動」『史林』六四―二、一九八一年を参照。
- ⑩ 『政治綱領』については、拙稿「コンラースと社会主義」『歴史学研究』四四―一、一九七七年を参照。
- ⑪ Hays, *op. cit.*, pp. 8-9.
- ⑫ Paul Kleppner, "Government, Parties, and Votes in Pittsburgh," in S. P. Hays, *City at the Point* (1989), p. 157.
- ⑬ Hays, *op. cit.*, p. 14; Kleppner, *op. cit.*, pp. 155-66.
- ⑭ Hays, "The Politics of Reform in Municipal Government in the Progressive Era," *Pacific Northwest Quarterly*, 55-4 (1964), p. 163.
- ⑮ 「ワシントン制」の中心・下層階級の影響力が排除されたことは、Martin J. Schless, *The Politics of Efficiency* (1977), pp. 139-40, 176-80, 190 を参照。
- ⑯ Hays, "The Politics of Reform," pp. 161-63, 165; *idem*, "The Changing Political Structure," pp. 23-25.
- ⑰ Melvin G. Hollis, *Reform in Detroit: Hazen S. Pingree and Urban Politics* (1969), pp. 161-71.
- ⑱ そのため、都市の構造改革は労働民衆の強い反撥を招いた。その一例が、ワシントン市長を一九七七年から務めた James D. Phelan の市政である。裕福な銀行家であった Phelan は、特許規制、運賃引下げ、市有制、課税の平等化といった要求を無視する一方で、市長の権限拡大、経費削減、メリット制や市単位代議制の導入を推進した。このため、教師の給料が欠配したり、医療行政が縮小・改悪され、夜

中に街灯が消された。また、第二章で述べた御者らを中心とする一九〇一年のストライキにおいては、市長は、商工会議所会頭でもあった

警察長官にスト破り労働者を保護させ、ストライキつぶしをはかった。このため彼は、同年の選挙では統一労働党の前に敗北したのである。

結 語

本稿は、労働史と都市史の架橋を試みる際の枠組をとりあえず作ろうとしたものであった。ひとまずの結論として、次のようにまとめられるであろう。

階級とエスニシティによる居住空間の分離を特質とするメトロポリスの形成過程において、周辺部で持家を獲得できた熟練層と都心に留まった半・不熟練層との間には亀裂が生じ、不動産所有者である労働者の間では保守的で排他的な意識が醸成された。労働者の集中した都心部では対抗的労働者階級文化が形成されるが、これを忌避した工場の周辺部への脱出は、労働者居住地域の分散と相互交流の欠如をもたらした。また、労働者は労働と生活の場での闘いを階級原則の下で統一せず、民族的・地域的帰属が支配的な生活の場ではマシーンによって住民あるいはエスニックスとして動員され、さらに、都市政治の集権的構造改革の結果彼らの政治的影響力は封殺された。

メトロポリスにおける労働者の居住パターンは階級的連帯よりも分断と分裂を促がして、階級意識形成にマイナスに作用し、労働者は階級的政治闘争を展開するスペースタイプと力量をもちえなかったのである。

strengthening the local police force.

Actually, already in the 1910's, such people as civil servants in the General Government and Hara Takashi 原敬, an able Japanese politician, envisioned reforming the military police system which entrusted gendarmes with handling general law and order matters. But it was not until the March First Movement that military authorities both in the Korean General Government and in Japan had come to recognize the necessity of replacing the military police systems with ordinary ones.

After repressing the Korean uprising, in the course of legally changing police systems, police expansion was also realized. It was Usami Katuo 宇佐美勝夫 and Kunitomo Shōken 国友尚謙, both high-ranking officials in the Korean General Government, who fully recognized the urgency of expanding the security force and who made efforts to realize expansion when negotiating with the Japanese government. Then Mizuno Rentarō 水野鍊太郎, new director-general of political affairs and bureaucrats Mizuno brought with him from Japan, according to fixed line, strengthened the police force immediately after the 1919 reform.

The course of police expansion is thus represented with the conclusion that realism in the colony was incorporated in the form of colonial policy by colonial officials.

The Birth of Metropolises and the American Working Class

by

TAKEDA Yu

In the process of transition from the implosive and socially intermixed "walking city" of the nineteenth century to the explosive and segregated metropolis of the twentieth, the skilled workers could afford to move out of the core and purchase their homes in the newly developed outer rings of the metropolis. And yet the less skilled workers were left in the slum areas of the inner city, being separated and segregated spatially as well as socially from those skilled workers in the outer rings.

At the core of the metropolis where most workers had concentrated,

oppositional working-class culture began to emerge at the end of the nineteenth century and forced manufacturing plants out of the central business district, but this exodus of factories into the periphery resulted in the dispersal of working-class districts, thereby separating workers of one area from those of another and diminishing chances of solidarity.

Moreover, the metropolitan workers were mobilized as workers at work but as ethnics and residents at home. They were thus unable to connect their struggles at the place of work with those at the place of life under the unified principle of class. And, as a result of structural reforms of city politics, especially a substitution of city-at-large election for the decentralized ward system, the political influences the working class had retained were reduced to a great extent.

The American metropolitan workers at the turn of the century had great difficulties in developing class perspectives and consciousness as well as political strength.